



メタセコイヤ並木

滋賀県のマキノ町に、メタセコイヤ並木があります。マキノの町からスキー場に伸びる、まっすぐな道。2.5キロほどの間に、約500本。30メートルほどの樹高に育つ巨木ですから、並木は厚みのあるトンネルを作ります。両側に果樹園が広がり、別世界にいる気持ちになります（近所にカタクリの群落があり、春にはそれも楽しめます）。



中嶋哲夫の「人事も歩けば」



並木づくりは1981年に開始。学童農園「マキノ土に学ぶ里」の整備事業として、果樹生産組合の方々が植えられたとのこと。果樹園の防風機能も兼ねているのでしょう。当時の写真をみると、道路は未舗装・未整備です。湖西線（JR）の開通が1974年です。また、琵琶湖畔を走る国道161号線も、湖西道路が開通するまでは渋滞の名所でした。その最も奥ですから行きにくい場所。マキノは、スキー客以外にはなじみのない場所だったと思います。筆者も、湖北地方を風俗慣習の宝庫だと思っていました。筆者が初めてマキノを訪ねたのは、1990年代です。並木づくりは、地味な地域活性化の取り組みだったと思います。

並木を車で走りながら、2つのことに気づきました。ひとつは場所によって、日射しの入り方が異なること。ピックランド（農業公園施設）一帯は、並木が道路を完全に覆っていて日射しが届きません。少し北に行くと、少しだけ日射しが



▲次世代の樹木

届きます。最も北のブロックは、半分くらいの日射しが道路に届きます。道路幅はほぼ同じですから、樹木の大きさで日射しの違いが生まれています。日射しが少ないのは、早い時期に植えられた巨木の並木。農業公園施設の一帯は、最初に植えられたのでしょうか。その成果をみて、次のブロック、第3のブロックと、賛同者を増やしながら並木の範囲を広げたことが思い浮かびます。

もうひとつは、並木のところどころにあるスペース。小さなメタセコイヤが植えられています。あれだけ大きな樹木ですから、台風などで倒木も起きるはず。並木を維持するためには、細かく補植し、次の世代を育てる活動が必要です。そのほかにも、雑草の刈り取り、落葉時の落ち葉かき、観光客のゴミの片付け等、並木を美しく保つ地道な作業の担い手がおられるはず。作り始めて40年、樹木と世話をする人の両方が次世代を生み出すことで、並木が維持されています。

（MBO 実践支援センター代表）